第３４回市民自治推進委員会　産業躍動部会会議録

（敬称略）

|  |  |
| --- | --- |
| 開催日時 | 令和４年１０月　３日（月）１８時００分～１９時００分 |
| 開催場所 | 登別市役所　２階　第２委員会室 |
| 出席者 | （部 会 長）川田　弘教（副部会長）吉田　武史（部 会 員）小川　昌宏、近井　一夫、宮下　裕次、玉川　美智子（庁内委員）服部　仁（事 務 局）大越　智輝、佐々木　健、松下　英冬　（欠席委員）鈴木　高士、渡部　光夫　　　　　　　　　　　　 |
| 議題 | ・今後の取り組み案について |

【今後の取り組み案について】

～前回部会にて議題に上ったブリの活用法につき、他自治体の例を紹介～

（部会員）

　ブリだけでは量も時期も限られてしまう。鮭やマダラなども含めた調理法を、登別温泉調理師登包会の渡辺氏に相談してはどうか。

（部会員）

　一般的な西京漬けでも、のぼりべつ牛乳を使用するなど、地元特産品と地元の新しい産品を組み合わせた形とすれば北海道中に広まるのではないか。

（部会員）

　様々な種類の魚や味があれば販路も広がる。また、一般の家庭でも調理ができるよう料理教室の開催やレシピの公開を行えば、普段の食事にも取り入れてもらえるだろう。

（部会員）

　販売を目的とせず、レシピを公開するだけの方が取り組みやすいのではないか。

（部会員）

　過去に行われていた「つけものフェスティバル」のような参加型のイベントはどうか。

（事務局）

　食品を扱うイベントを開催する場合は、保健所への届出が必要となる場合があり、現在のコロナ禍の状況では、かつての「つけものフェスティバル」のような形での開催は難しいかもしれない。

（部会員）

　食に関することに限らず、市が産業躍動部会と連携して行えるような取り組みはあるか。

（庁内委員）

　前回の部会の際、登別ブランド推奨協議会とのコラボレーションを提案させていただいたが、食に関すること以外となると市内の学生とコラボレーションした広報活動などが行えるかと思う。

（部会員）

　産業躍動部会と名乗っているのだから市内の産業を躍動させたい。現在は食に関することが中心となっているが、定住人口や交流人口の増加に資するような取り組みを行うべきであると思う。人口増加には、若者が働きたいと思えるような就労場所が必要であり、企業誘致などが考えられる。

（事務局）

　前回の部会でも部会員より、日本工学院北海道専門学校や室蘭工業大学があるにもかかわらず、市内に就職先がないため若者が登別から去っていくという話や、起業家の育成やチャレンジショップの支援のことなど、産業躍動部会の取り組みに関わるような話もあった。

（部会員）

　個人的には旧登別大谷高校の跡地に女子の短期大学を誘致できればと考えていた。元々学校があった土地を活用するのであれば学びに関することを行った方が良いだろうし、また、登別の定住人口を増やすには”恋愛”が必要だと感じている。現在近隣にある学校には男子学生が多いため出会いの場が少ない。更に、登別青嶺高校では女子生徒の比率が高いものの、周辺に進学先の選択肢が少ないために卒業後は登別を離れてしまうケースも多いと聞く。近隣に選択肢があるのであれば、そちらに進学させたいという親も相当数いるはずだと感じる。

（部会員）

　産業躍動部会ではこれまで、登別温泉調理師登包会の渡辺氏や北海道登別明日中等教育学校の生徒に協力していただいた地場産品を使用した料理動画の作成、感染症対策を行っている飲食店の紹介動画の作成、ウォーキングマップの作成などの取り組みを行ってきたが、それらの取り組みが市民に十分に伝わっていないことが問題かもしれない。

（部会員）

　昨年度公開した料理動画がなぜ注目を集められなかったのかというと、あのような動画では若者が前面に映るような演出上の工夫が必要だったのではないか。

再チャレンジする場合、講師役を部会員の漁業の専門家や農業の専門家にお願いし、身近な食材での家庭料理の紹介という形もできると思う。また、YouTubeへの投稿のみでは話題性に限界があるため、ショートバージョンをInstagramで公開することでYouTubeに投稿した本編へ誘導するなどの取り組みも考えられる。

（部会員）

　これまでの取り組みは制作して終わりという印象があった。今後は制作後に効果・検証を行いながら次の取り組みを進めていきたい。

（部会員）

　漁師や農家の知識、魚の下ろし方や味付けのワンポイントアドバイスなどを伝える短い動画も効果的なのではないか。また、それらの動画に若者が親近感を抱けるよう、出演者は学生とした方が良いと思う。

（事務局）

　演出上、学生に出演いただき、メニューの監修については従来通り登別温泉調理師登包会の渡辺氏にご協力いただくという形が考えられる。

（部会員）

　情報の拡散方法のひとつとしてSNSを活用し、学生にも出演者として協力をいただきながら登別の産物を発信していきたい。

（部会員）

　食だけではなく登別というブランド自体をいま一度広める必要がある。以前に北海道新幹線のPRを行うため本州へ行った際に、登別をト・ベ・ツと読まれたことがあり、登別の知名度が低いことを認識した。産業躍動部会の取り組みを通し、登別の魅力とともに登別という名前もPRしていきたい。

（事務局）

　ここまでのお話を総合すると、SNS上での拡散をイメージしての活動となるかと思う。また、活動の中ではメニューの監修者として登別温泉調理師登包会の渡辺氏の力をお借りする必要があると思われるため、今回のお話を共有したい。

（部会員）

　動画を作成するのであれば、親近感を抱いてもらうため、手軽な家庭料理を題材とすることが重要ではないか。

（事務局）

　題材についても昨今の流行を捉えるため、学生を交えての検討を行ってはいかがか。

（部会員）

　若い世代の発想を取り入れて話をすることで、取り組みが様々な方向へ広がっていくこともあるかと思う。

（事務局）

　他の部会でも市内の学校にご協力いただいているため、産業躍動部会へもご協力いただけないか打診してみる。

（部会員）

　登別市の市制施行５０周年記念事業として行ったBe Smileプロジェクトでも市内の学生の皆さんに協力してもらったが、その流れを一過性のものとせず、引き続き若者の力を生かした取り組みを行っていきたい。

（事務局）

　学校へ協力を依頼する際、協力していただく内容は食に限ることなく、いま一度登別を世界に発信するための取り組みということでよろしいか。

（部会員）

　内容についてはあまり絞らず、登別に関すること、という大きな括りでご協力いただきたい。

（部会員）

　観光地や景勝地の紹介でも良いと思う。

（部会員）

　「初めての体験」というものに視聴者は興味を抱くと思う。若い世代の人に体験したことのない登別の魅力を初体験してもらい、その様子をInstagramなどで投稿すると良い反応が得られると思う。また、YouTubeには詳細な情報や専門家の話も盛り込んだ本編を投稿することで広く拡散されると思う。

（部会員）

　シリーズ化することで、登別市が面白いことを始めたなと思ってもらえると思う。

（部会員）

　我々が旅行に行った際にどのような場所を見学するかと考えると、例えば余市町であればウィスキー工場が候補に挙がると思う。登別市には見学が評判となっている工場はないが、産業躍動部会が紹介すると評判になるかもしれない。従来の広報活動ではCMなどの高価な方法が中心だったが、近年ではSNSでの口コミが中心となっているので様々な取り組みが考えられる。

（部会員）

　私の知り合いに札内町でキャンプ場を開設した人がいるが、それをGoogleにアップロードしたところソロのキャンパーが集い、その様子が更にSNSなどで広まった結果多くの人が集まるようになって経済効果も生まれた。産業躍動部会でもこのような流れを作っていきたい。

●次回日程：学生の招聘について学校側と協議の上、11月に開催を予定